

II-193

河川水辺の環境に関する意識調査

北海道大学大学院	学生員	酒井 匠
北海道大学工学部	正 員	黒木 幹男
北海道大学工学部	正 員	板倉 忠興

1. はじめに

近年河川をとりまく環境に対する地域住民の関心が益々高まってきており、環境に留意した河川事業が全国的に行われている。ひとことで河川環境といってもさまざまな要素が考えられる。本研究では、視覚的な河川環境として河川景観を取り上げ、アンケートによって河川景観についての意識調査を行った。

2. アンケートの方法

アンケートは、河川でみられる風景の写真を見せ、それについて好き嫌いを5段階（好き←5，4，3，2，1→嫌い）で評価してもらう方法をとった。写真の枚数は12枚である。今回は学生（大学，短大）を対象にした。アンケートの回答人数は全体で206名であり、理科系の学生（土木工学科の学生、男のみ）が66名、文化系の学生が140名（男58名，女82名）である。

以下では回答者を次のようなグループに区分して比較検討を行った。

「全体」：	全アンケート回答者	206 名
「理系」：	理科系（土木工学科）の回答者	66 名
「文系」：	文化系の回答者	140 名
「男」：	男子の回答者	124 名
「女」：	女子の回答者	82 名

3. アンケート結果とその解析

1) アンケートの集計結果

「全体」の平均点の分布を図示すると図-1のようになる。写真-①，⑤，⑧，⑫の4枚は他の8枚に比べると、平均点が高く明確に2分されている。他の回答グループに付いても同様の傾向が認められた。

2) 自然的か人工的か

高い平均点を獲得した4枚の写真をA群、その他の8枚をB群と呼ぶことにする。

A群の写真では、図-2の例のように人工構造物がほとんど画面に写っていない。これに対して図-3，4の例のようにB群の写真には、多かれ少なかれブロック等のコンクリート構造物が写っている。このことからコンクリート・ブロックなどの人工構造物のある風景よりも、いわゆる「自然」な風景のほうが好まれていることが分かった。

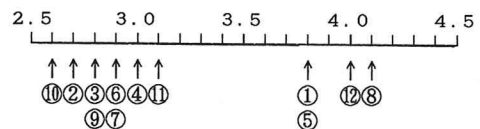


図-1 平均点の分布

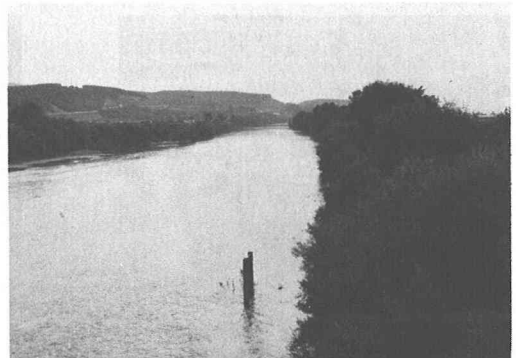


図-2 A群の写真例（写真-⑫）

3）コンクリート構造物のある風景の評価

しかし実際の河川では、上流から下流まで全てを全く自然のまま残すことは不可能である。そこで次にコンクリートブロックのある景観の中では、どのようなものが好まれるのかを考察した。

B群の8枚の写真のうち各回答グループに共通して高い平均点を得ているのは、写真－⑥、⑩であり、平均点の低いのは、写真－③、⑪である。他の4枚は回答グループにより、評価が異なる。

この4枚の写真を見ると、写真－③と⑥、写真－⑩と⑪はそれぞれ写真の構図が似ている。

図－3に例示した写真－⑩では堤防の上部に若干の緑があるが、写真では堤防上部まで護岸があるような感じを受ける。それに対し、図－4に例示した写真－⑪では堤防上部や水際部に緑がみられる。また、写真－③と⑥を比較しても同様のことがいえた。

この2組の写真を比較する限りでは、緑が適度に見られることにより、相対的に評価が高くなったと推測される。

4）階段護岸と従来型護岸

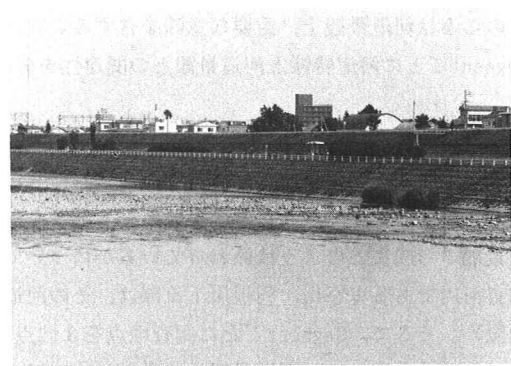
近年、階段護岸が多く用いられるようになり、親水性の面ではある程度の評価を得ているが、視覚的な評価はどうか興味のあるところである。

B群の写真の中で、階段護岸が写っているのは写真－⑦、⑨、⑩、従来型の護岸が写っているのは写真－③、⑥、⑪の各3枚である。「全体」の平均点を更にそれぞれ3枚で平均すると、表－5のようになる。階段護岸は比較的评价が高くなるかと予想したが、従来の護岸と比べて大きな差がみられず、むしろ平均点が若干低いという結果になった。

階段護岸を視覚的に評価した場合、必ずしも高い点が得られるわけではないようである。



図－3 B群の写真例（写真－⑩）



図－4 B群の写真例（写真－⑪）

護岸	写真	平均点	3枚の平均
階段	⑦	2.87	2.73
	⑨	2.78	
	⑩	2.55	
従来	③	2.77	2.91
	⑥	2.89	
	⑪	3.06	

表－1 護岸による平均点の違い

4. まとめ

以上、アンケートの結果を大雑把に考察して、次の結論を得た。

- 1）景観としては緑が多い「自然」のままの川が好まれる。
- 2）護岸等の人工構造物のある風景でも、評価は低かったが適度に緑が存在すれば評価が相対的に向上する。
- 3）階段護岸は、視覚的な評価の場合必ずしも高い評価が得られるわけではない。

《参考文献》桜井善雄著：水辺の環境学，新日本出版社（1991）